

## どこまで来たのか：生態誌の編集を振り返って

日本生態学会誌前編集委員長 大串 隆之

4年前、当時の鷲谷会長から、生態誌を学会員が進んで手に取るような魅力ある雑誌に変えてくれないだろうかとの依頼を受けました。しかし、これはなかなかの難題です。そもそも私としても、生態誌を長い間手に取って眺めたことがなく、その理由は、すでに読みたいという代物ではなくなっていたからでした。さてどこから手を付けたらよいのやら、といろいろ思案していました。ちょうどその前年に、和文誌検討委員会から会長宛に生態誌のあり方について答申案が提案されていたので、その内容も参考にしながら、周りの若手の学会員と「和文誌再生委員会」を立ち上げて、どうすれば魅力的な雑誌にすることができるか、半年にわたりいろいろな面から検討しました。その結果、われわれなりの問題点を整理して得られたのが、新しい編集方針の柱とも言うべき「載せたい雑誌から読みたい雑誌へ」という結論でした。この経緯と理由については、「新たな船出：日本生態学会誌の編集方針」（大串 2005）で詳しく説明しました。この編集方針の下、これまでとは一味違う誌面作りを目指して、非力を顧みず、さまざまな取り組みを行ってきました。これによって、特集・総説・連載など幾つかの特徴を備えた雑誌に衣替えることができたように思います。もちろん、これらは全く新たな取り組みというわけではなく、特集や総説というカテゴリーは以前からありましたし、これをより充実させたにすぎません。連載は新たな試みですが、これまで誌面の制約によってなかなか取り上げられなかったものです。従来の生態誌は原著論文がほとんどで、これらが十分に活かされなかったように思えます。材料は同じでも料理の仕方によって随分と変わるものだと感じて頂ければ、編集の甲斐があったというものです。

編集のスタートにあたって、その方針を詳しく述べた編集委員会は、生態学会の長い歴史を通してもおそらく初めてでしょう。しかし、これはどうしても必要なこと

e-mail: ohgushi@ecology.kyoto-u.ac.jp

でした。新しい編集委員会の目指す方向とそれにかかる意気込みを学会員の皆さんにぜひ知って頂きたかったからです。同時に、われわれ編集委員の責任も自覚するという一石二鳥の役割がありました。編集委員の選定にあたっては、事前に編集方針を読んでもらい、それに賛同した方をお願いしました。「載せたい雑誌から読みたい雑誌へ」という変革を実践するためには、学会員にその意図を十分に理解してもらわなければなりません。われわれの新たな取り組みの評価は、このモノサシによってなされるからです。長年「載せたい雑誌」であった生態誌に慣れ親しんできた学会員からは、この方針に違和感を覚えられた方もいるでしょう。しかし、これまでの生態誌がただ「載せたい雑誌」であったこと、そして会長自らがその結果を憂慮せざるをえなかったことを考えれば、「読みたい雑誌」を求める学会員のために少し舵を切ることが必要でした。もちろん、この編集方針をもり立ててくれる投稿論文は大いに歓迎しました。当初は、特集や総説のほとんどが編集委員会からの依頼でしたが、この方針が少しは浸透したのでしょうか。昨年からは、会員からの投稿も目立つようになったのです。その幾つかはすでに誌面で実現しています。また、博物館や中学・高校という教育や啓蒙の現場からの報告、会長からのメッセージや各種委員会の取り組みの紹介など、学会と学会員を繋ぐ新しい情報誌としての役割も持たせるようにしました（まだ、学会から学会員へという一方向だけですが）。これらは、「載せたい雑誌」では決して実現できなかったものです。

生態誌の顔ともなった総説や特集の企画を通して、日本の生態学の将来を担う若手研究者のレベルアップのための機会を、いささかでも提供できたのではないかと思います。生態誌は日本の生態学の底上げの役割も担っています。他の研究分野の会員も興味深く読める原稿に仕上げるためには、丁寧な校閲のプロセスが何よりも必要でした。このため、著者には幾度となく原稿の書き直しをお願いしたこともあります。また、特集では新た

に趣旨論文と総括論文を義務づけました。これがなければ、ただ内容が重複する複数の論文が並んでいるだけで、特集を載せる意味はありません。本当に大事な「特集の目的は何か？ これによって何が分かったのか？ そしてこれから何をしなければならないのか？」というメッセージが伝わらないからです。特に、総括論文は研究分野の展望が凝縮されるため、特集の目玉とも言うべきものです。同時に、著者の実力の程がはっきり分かるのもこの総括論文です。特集論文を執筆された方だけでなく、校閲の労を取っていただいた方にも、多様な研究分野の問題点の整理と今後の展望の提示の大切さを分かって頂けたなら、われわれの苦労も報われます。これによって、日本の生態学がさらに発展することを大いに期待しています。特に、誌面作りに協力して下さった多くの若い学会員が、これからの日本の生態学のレベルアップに必ず貢献してくれるはずです。われわれが蒔いた種が大きく成長する姿を、今後も見守っていきたいと思います。

さて、この3年間を通して、生態誌はどれだけ身近な存在になったでしょうか。われわれが目指した「読みたい雑誌」に少しでも近づいたでしょうか。難題とはわかっていながら、敢えてこの役割を引き受けたのは、学会員に生態誌をもっと身近に感じてほしい、そして、学会員自らが喜んで支える雑誌にしたいという思いからでした。将来の生態誌の編集を積極的に担う学会員が輩出されることを期待しています。昨年夏には、次期の生態誌の編集委員長を公募しました。残念ながら、4,000人もの学会員の中から手を上げてくれた方は、ただの一人もいませんでした。まだ時期早尚なのでしょうか。生態誌に限らず、和文の学会誌がかかえる大きな問題は、これ

まで刊行してきたという理由だけで、それを惰性的に続けるということです。新たな課題を掲げて、それに向かって果敢に挑戦することが、読みたい雑誌であり続ける秘訣です。このためには、学会員に生態誌についてもっと関心を持ってもらうことです。編集の折り返しの時点で、新たな取り組みについてのアンケートを行ったのも、学会員の一人一人に生態誌のあり方について考えてもらいたかったからです。「載せたい雑誌から読みたい雑誌へ」というこの間の取り組みが、議論を始める舞台の準備を少しでも提供できたなら幸いです。学会活動に積極的に参加する学会員が輩出されることを、生態学会の今後の宿題にしたいと思います。会員数だけでなく、名実ともに日本の生態学を担うしっかりした学会になってほしいのです。

これまで、新たな取り組みに対する挑戦の気持ちを忘れずに任期を全うすることができたのも、生態誌をもり立ててくれた多くの若手の学会員の熱意でした。度重なる改訂やうるさい取り立ての要求に快く応じて頂いた著者と校閲者の方々、連載の企画者の方々、過酷な仕事を押しつけてきた編集幹事の方々、膨大で煩雑な編集事務をしかし結構楽しみながらこなしてきた前編集事務局の前田優子さんには、この場を借りて厚くお礼申し上げます。

## 引用文献

大串隆之 (2005) 新たな船出：日本生態学会誌の編集方針．  
日本生態学会誌 55:215-218